「種山ヶ原はいま⑪」 種山ヶ原を訪れた詩人たち①

11月24日の夜から種山ヶ原に雪が降った。星座の森の職員が朝来た時は15 cm以上で職員が雪囲いに取り組んでいた。これから4月まで銀世界の種山ヶ原。雪の中、5月オープ









(1) 『真壁 仁氏の 種山ヶ原』 「文学の旅」より

宮沢賢治先生が種山ヶ原を訪れ多くの作品を書き上げている。その作品を 愛し、その高原を訪れる詩人も多い。野の詩人・真壁仁氏も昭和 46 年 9 月 22 日に「文学の旅」紀

行文の取材で訪れている。地元の松淵章氏、佐伯公郎氏が同行している。

「水沢から岩谷堂を通って姥石峠を越え、大船渡へ通ずる盛街道も、気仙の山地を横断して海岸へ出る古い道の一つなのであろう。人首川の岸辺の道を私は車でさかのぼり、人首城のあったという米里の町で降り、大きな門構えで、高台に建っているこの家は、もとここの城主の家老か客人であった家柄で、盛岡に住む詩人佐伯郁郎の生まれた家であった。

米里中学校の庭の小川未明の碑は、郁郎が未明に、揮毫を頼み、村長であった郁郎の兄信が、昭和29年町村合併の記念に建立したのだという。

「いかなる烈風も 若木を折る力なし 伸びれ子供等よ」

と掘った青味のある石の碑が、端正な枝ぶりで伸びた 銀杏の大樹に覆われて建っていた。|

※児童文学者小川未明氏(新潟県出身)の文学碑は、 全国でわずか3基だけで、稀有。

文学碑は校舎が2度改築され、現在の人首小学校の校 庭前に移築されてある。

「私たちは種山ヶ原へ車を走らせた。姥石峠から、県 営牧野の道に折れて、しばらく入ったところで車を捨て



る。高原の背筋をのぼって行く路々には、芒の穂が銀色に光っている。低い灌木の藪がつきると急に展望がひらけ,目指す立石のあいだまでいちめんの秋草の原であった。ハギ、オミナエシ、アキノキリンソウ、ウメバチソウなど、いずれ劣らず楚々として露ふかい季節の沈んだ色どりでないものはない。その中でリンドウの花だけがひときわ鮮やか紫紺の色を染めて、目にしみた。初夏の季節なら、ここは山つつじが燃え立つように華やぐ原っぱだという。大きな岩が砦のように岨立っている立石のところからは東に物見山、北に大森山が、なだらな傾斜で裾をひろげ、牧野はその斜面に

拓かれている。大きな眺望であった。賢治 自然石の大きな台石に、斜めに貼られて

いる。昭和37年の建立である。

種山ヶ原の草の中で 刈った草は どこさが置いだが忘れだ 雨ぁふる

雲の垂れこめた日なら確かに、刈った草の置き物もことだったがわかっなくなるにちがいない。置き忘れた草の中には、せ高の芒あざみも、忘れな草も入っていた。長嶺の方に置いた草などは雲に持って行かれて無くなったのだ。雲を追っかけて行くと、雲も無くなる。その広がりがそのまんま感じられる。

牧歌は、賢治が自分で作曲して農学校の生徒に歌わせたものであるが、その 曲調は、高原の広さに沁みとおるような悠長さを持っている。|



※昭和46年9月に真壁仁氏が「賢治の森」を訪れた時松淵章氏が撮影 詩碑は37年に建てられたもの。50年前の種山ヶ原。中央が真壁仁氏、 右が佐伯公郎氏

同行した佐伯公郎氏から「毎年6月の第二日曜日に、種山ヶ原の山開きが行われ、詩碑のあたりで鹿踊りも見られるので、その頃また来ないかという誘いに大いに心を動かされ」種山ヶ原を去った。しかし、再遊の話はついぞ聞かない。

「ひとかべ文学散歩」(江刺教育委員会発行 米里公民館編)より ※松淵章氏・佐伯公郎氏が中心に編集

現在の「賢治の森」。11年前は松林に覆われ、見晴らしは良くはなかった。私達は宮沢賢治が訪れた頃の野芝やレンゲツツジがいっぱい咲く種山ヶ原にしようと吹雪の中松の木を伐採。そして見事に昔のように開かれ、見晴しがよくなった。寒かったが、達成感はあった。その後笹薮を切り開きツツジ・東菊など昔からの草花を守ろうと努力してはいるが、自然の主張の強さをつくづく感ずる。





賢治詩碑「牧歌|

立石



2012年12月7日15人程で頑張りました



(2) 串田孫一氏 「みちのく牧歌」より

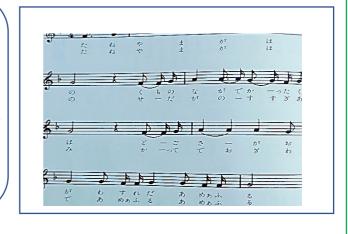
昭和30年9月、哲学者であり、随筆家であり、一方アルピニストでもあった串田孫一氏も種山ヶ原を訪れている。串田孫一氏は「みちのく牧歌」の冒頭で、「種山ヶ原」のことを次のように記している。「牧歌」が多くの詩人に歌われていたことを知り、地元の者としてとてもうれしい。今後自信をもって歌い広げたい。

① 天気の具合はあまり良くなかった。けれども曇ってゐるにせよ、またたとえ雨が降り出したにせよそれでもいいと思ってゐた。といふのはこれまで宮沢賢治のあの歌と「種山ヶ原」といふ長い詩でしか私はこの高原を知らなかったからだ。

種山ヶ原の 雲の中で刈った草は どごさが置いだが 忘れだ 雨 ふる

種山ヶ原の せ高の芒あざみ 刈ってで置ぎわすれで 雨ふる 雨ふる

種山ヶ原の 霧の中で刈った草さ わすれ草も入ったが 忘れだ 雨ふる



※6番まである

この歌には賢治の曲がついてゐる。そのラルゴを私は時々歌ふ。詩人の草野心平さんは 酔っぱらふとこれを歌ふが、私は心たのしい時よりも、変に詫びしくなると自然に口に出 て来る節だ。この侘しさといふのはそんなに単純なものではないらしい。

※ラルゴ Largo 音楽の速度記号「ゆるやかに」 通称「ヘンデルのアリア」

<種山ヶ原を訪れる前に、串田孫一先生は盛岡・小岩井農場・花巻イギリス海岸を訪ね、 水沢には夕方やって来た。ものすごく繊細に観察し、記録していることに感心した。>

水沢から太平洋の大船渡にぬける自動車は日に二回で、私は朝七時に乗った。岩谷堂、 人首をとほって姥石峠まで130円分二時間近く乗った。多分、泊りがけで水沢や岩谷堂へ 出て来た山麓の村の人たちが乗ったり降りたりする。農家のおばあさんたちが一度に八人 乗って来たて、車の中は賑やかになった。

私はバスの後の方に乗るのが好きである。東京の町でも、一番うしろのが空いてゐれば そこに座ることにしてゐる。田舎のバスでは、そこにゐると猛烈にはね上がるのを覚悟 しなければならないが、それが嬉しくて好きである。それにこんな風に、土と日光との 染みついたいい顔色の農婦たちを、しげしげと眺めるのは後の席が上等である。

竹の杖につかまって、じっと座ってゐるおばあさんは、自動車に酔ふのかもしれない。 目をつぶって念佛を唱えてゐる容子である。徳兵衛といふ人のせがれの噂をしあってゐ る大声の元気のいい二人がゐる。みんなそれぞれの表情が、三、四十パーセントはその 深い皴によって顔にこびりついてゐるので、私は彼女たちが自分たちの村や家や、野良 の仕事をしながら、どんな姿で暮らしているかが、妙によく想像蔵できるのだ。

人首から釜石線の鱒沢に出る。五輪峠を越す道にちょっと野心を持ってゐたので、隣にゐたごましほの髭の濃い樵夫風の老人に時間がどれくらいかかるかを聞いておいた。

この自動車が峠へ向かってのぼって行く道を、黒盛街道といってゐる。二股といふどこにもあるような部落を過ぎるころから、自動車は、クウクウいひ出し、運転手はギヤをさかんに入れかえる。種山の長峰は目の前にもり上がり、牧柵が見える。案外雲が高くて、遠くも見えそうだ。

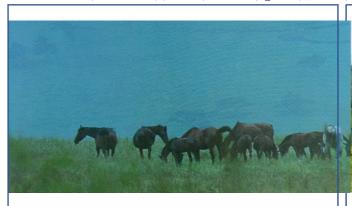
「種山ヶ原」の歴史

藩政時代 伊達藩直営の放牧地 明治以降 近在農民の採草地

明治 34 年 軍馬補充部六原支部種山出張所 大正 14 年 世田米町営放牧地その他は国有林

昭和24年 岩手県営種山牧野

戦前は軍馬生産を目的にしたが、戦後馬から乳牛へ、乳牛から肉牛へ畜産体制が変化。 馬放牧の頃は、馬は草だけでなく笹や木の枝も食べていた。しかし、レンゲツツジだけ は嫌い、牧野は野芝とレンゲツツジの美しい高原が保たれていたのだ。牛に代わってか らは口・歯の携帯の違いからか牧草地が明らかに変化していった。現在は江刺畜産公社 が管理し、5月から10月まで放牧され、多くの牧草地は個人に草地として貸し出され ている。私たちは昔の「種山ヶ原」の自然に少しでも戻そうと努力しています。









③ 自動車がとまる峠を越したところに数軒の家があり、雑貨屋もある。こ の雑貨屋へ頼めば泊めて貰えることを聞いてゐたが、それよりも、私は種山 ヶ原の夜に魅力を感じてゐたので、少し大袈裟のようだったが、山靴をはき 野宿をしてもいい支度はしてゐた。コナシやクヌギの林の中にアカマツの高 くのびている坂をのぼる。もう道には人の足跡はなくて、馬の足あとばかり でそんなに息の切れるほどの坂ではないけれども、立ちどまると、雑木林の 谷の、もう広々とのびている草原で鳴いている虫の声の大合唱が聞こえてく る。<中略>

天は暗くなったり明るくなったりする。その林はすぐなくなって、草の斜 **面が続く。ゆるやかな起伏のその遠くまでの連続を書き表すのに、わたしは** やっぱり適当な言葉を持っていない。信州でいえば霧ケ峰のようなところ だが、・・・・<中略>

私はヤマハウコ(ヤマハハコのことと思う)やウメバチソウの咲いている窪地 |に、この牧場での最初の馬を見つけた。かたまって、後足を不器用におり曲 |げて眠っている。虫の合唱をききながら、みんなおだやかにいびきをかいて いる。その中の一頭が、私の足音に目をさまして首をあげて見ていたが、立 ち上がりもせずに、また鼻面を草にうめて眠ってしまった。私はここまで来 ると、なだらかな山巓のたった一人の人間になり、しばらく歩いて出会った 数頭の牛など、大きな動物たちに親しみを覚えて来た。彼らの領域に入って |来た私は何とかして、挨拶をしなければいけないと思った。

姥石が 9 時、種山(物見山)の頂上が 1 0 時。姥石峠が 626 メートルで 種山が 781 メートル。北を見れば、少し左手にここより 50 メートルばかり 低い大森山。それから大体正面の、山と呼ばれては恥ずかしいだろうと思う ような丸森山を越して、ずっと遠くに、笠通山が二つの頭を見せている。 これは、遠野の方から東に向かって流れている北上川の支流猿ヶ石川の、も っと向とうの山だ





ヤマハハコ

④登る道々、目にとまった草花の名を手帳に書きとめて来たが、休むに都 合のよい岩のあるこの山頂には、殆どそれらの花々が咲いていた。

<中略>

天気がどんよりしているので、蝶の姿は殆ど見えないし、ヒヨドリとホ ホジロとモズの声を遠くに聞いただけだ。

あとはぼんやりとここに座っていればよい。誰もいない。何にも考えない。 風もまるっきりない。頭上の雲には天をのぞける少しの隙間もない。20 満分 の1の「一ノ関」と5万分のIの「人首」の地図を開いて、山の名をさがし 谷の名を見つける。その山や谷には、秋がよどんでいた。このあたりがきら びやかな色彩に賑わうことは考えられない。草が黄ばみ、褐色を増しながら 雲の下にかくれていくのではないだろうか。

書き忘れたが、この山頂には、賢治の短歌が厚い板に書かれて立っている。 「みちのくの 種山ヶ原に 燃ゆる火の

なかばは雲に とざされにけり」

賢治もこの秋の種山を歌にしたのであるが、ほかに8首ある。それらの中のメラファイアーの露頭は山頂を北に向って少し下ったところにある。

※他2首

「オパールの 雲につつまれ 秋草と われとはぬるる 種山ヶ原 |

「目のあたり 黒雲立つと まがひしは 黒扮岩の 露頭なりけり」

(5) 私はいつ知れず迷い出していた。姥石で聞いて、そんな道はついていないという五輪峠への尾根を辿りたくなった。雲が湧かない限り、霧が流れ始めない限り、大して深い藪こぎもせずに行けそうに思えるが、ともかく大森山の上まで行って更に北の尾根を見なければならない。

私は道のない草原を駆け下りた。黒扮岩の壁の下に水の湧き出ている所を見つけた。そこのしめった黒土には、馬の足あとがいっぱいだった。馬の水のみ場で私も腹這いになってその水を飲んだ。

道々5,6頭の馬や、少しはなれたところには2頭の緬羊もいた。しかし大森山の手前の広い鞍部には馬がいっぱいいた。私は少々具合の悪い想いでそこをとおり抜けてリュックサックを下ろして休むと、その中の1頭がやって来て、顔を寄せてくる。幼い時に馬に乗ったことはあるけれども、

こんな風に顔を寄せて来る馬を撫でたことはない。君、君ボクガサワッテ モ、オコラナイカイ?カマナイカ?

馬の鼻面はその毛が短く刈り込んであるようで手のひらがくすぐったい。 少し怖くなってかるくたたいてやるとポンポンいう。

「馬は何か欲しがっている。リュックサックを鼻面で押してみている。 気ノ毒ダケド何モナインダヨ。かすてらデヨカッタラ、サッキ買ッテ来タ ノガアルンダケド。

そのうちに馬はあとからあとから寄って来る。腰を下ろしてもいられないので立ち上がった私は十数頭の馬にまるくとり囲まれ、いつか何処かでこんな目に遭ったような気がしてはっきり思い出せなくて困ったものだ。人間のお嬢さんたちだったら、手帳をやぶってサインをすれば何とか恰好がつくのに僕ハ一体ドウシテアゲレバイイカ? と、ほんとうに声を出していった。」あんまり1頭のばかりを撫でていると傍らのが怒るのだ。怒るのは勝手だが、私の前で猛々しい真似はして貰いたくない。顔をすりよせるその容子は猫のあまえるのと同じだ。そうして驚いたことには、猫がそうするようにごろんと寝ころんでしまう。

これほどにまで愛情を示してくれて、光栄でもあるし、くすぐったくも あるのだが、その愛情に報いるにはどうしてよいのかさっぱり分からない。 昼食代わりに持っていたカステラはもうみんなにあげてしまったし・・・・・。

⑥ 馬たちと遊んでいたので大森山の頂上についたのは 12 時だった。種山はその時もう頂上を雲にかくし、西南の山々は見えなくなり、その雲は私がやって来た草原を数倍の速さで進んでくる。五輪峠の方向は大体見えるが、この雲より早く歩く自信はない。最後に別れた 2 頭の馬は、まだこっちを向いてそのまま立っている。小さく見える。

この雲は雨を降らせるかどうか分からないが、種山ヶ原の雲に包まれて、五輪峠に行く元気がどうも私にはなくなって来た。野宿は構わないが、秋の夜の雨に濡れて一夜膝を抱えている自分を想像するとあまり侘しすぎる。心残りもあるのだが、もうこの山頂へ鞍部から這い上がりだした雲に追い立てられる気持ちで西の急な斜面を下り始めた。<中略>ともかく中沢という部落へ下り、そこから人首へ出て、空模様によって明日のことを決めることにした。そうしたら落ち着きが出来て、私はクサボタンの花をノートに描いたりした。

「みちのく牧歌」(昭和30年9月号)より 次号は草野心平氏と種山ヶ原についてお知らせ します。